

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 深沢 了子

本論文は、芭蕉没後の18世紀初頭から、蕉風中興運動が本格化してゆく18世紀後半に至る上方俳壇（京・大阪俳壇）の状況を、各派の俳人の人的交流や、俳風、俳諧理念の変遷に着目しつつ、多方面から考察し明らかにしたものである。

従来の俳諧研究は、この時期を、技巧や奇抜な表現に走った都市風俳諧と、通俗・浅薄に傾いた田舎蕉門の対立する俳諧暗黒時代と規定し、具体的な俳人の動向や、作品についての検討がなされてこなかった。本論文は、上方の都市風俳諧で最大の勢力を誇った松木淡々の動向を中心に、江戸の洒落風俳諧が、貞門の末裔中心の京俳壇や、談林の遺風が濃厚である大阪俳壇に浸透していった過程を初めて明らかにした。特に、京俳壇くらべ、伝統的に雑俳的な一句の趣向を重視し、矢数俳諧など速吟を好む傾向のある大阪俳壇には、作意が強く、前句と乖離した「一句立ち」を旨とする淡々の俳諧を受け入れやすい素地があったという指摘は重要である。また、蕉風中興運動と都市風俳諧は繋がりが希薄であるという従来の見解に対し、江戸系俳人として淡々と近い立場にある宗屋・蕪村らの活動や作品を再検討し、都市風俳諧が蕉風中興運動に一定の役割を果たしたとする指摘も卓抜である。

談林風の作意と淡々風の作意の相違、あるいは京・大阪の田舎蕉門と淡々らの関係など、今後さらに検討すべき点もないではないが、研究史的に空白であった、この時期の上方俳壇の輪郭を明確に描き出した点は、画期的であり高く評価できる。よって審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に相当するものと判断する。